

7. 武田 晴人氏

たけだ・はるひと 東京大学大学院経済学研究科教授

日時 : 2001年9月11日

出席者 : 伊藤隆 季武嘉也 所澤潤 梶田明宏 富坂賢 黒澤良 清水唯一朗
土田宏成 小宮一夫 戸高一成 有馬学 エバ・ルトコフスカ 鈴木淳
東中野多聞 武田知己 鹿島晶子 高橋初恵

伊藤 きょうは、東京大学経済学部の武田先生にお話を伺うことになりました。この前お話をしまして、すごい情報をお持ちだと感じましたので無理やりをお願いした次第です。武田先生、もし必要なら2時間でも3時間でもお話しただいて、質疑をさせていただきたいと思いますのでよろしくお願ひいたします。

武田 (以下、特に断らない限り全て武田晴人氏) いちばん簡単にやると、15分ぐらいで終わりますが。

伊藤 いや、それはちょっとまずいので、もう少し。

武田 わかりました。東大経済学部で日本経済史を担当しております武田と申します。よろしくお願ひいたします。ほとんど顔と名前がわからない方ばかりで異国に来た感じですが、資料の所在情報を中心にして話してほしいということだったので、とりあえず私がこれまで見聞きした、あるいは経済学部の図書館を中心にして収集している資料について、多少ランダムな情報になりますけれども、ただ知っていることを洗いざらいお話ししようと思っています。経済史も歴史の一つの分野ですから、資料を一所懸命探しながらというのが大学院、学部の時代ぐらいからずっと続いておまして、私の研究分野は主として産業史とか、企業史に近い分野になります。それとご縁があって、とくに通産省の政策史にもかかわりを持ちましたので、そういった関係の資料が主になりますが、きょうお話しするのはそんなような体験談であるということになります。

比較的大きな資料で、いま公開もされているものを中心にお話を進めたいと思いますけれども、これまで収集整理にかかわった文書として大きいものは、レジメにある最初の二つです。経済団体連合会の初代会長だった石川一郎という方の財界活動に関する個人文書と、日本工業倶楽部が収集していたディスクロージャー資料ですが、戦前期の企業の営業報告書というものです。その他、ちょっと細かいものとか、整理の隅のほうでお手伝いしたものがありますが、順次お話しします。

最初の「経団連・石川一郎文書」というのは、『経団連30年史』を1977年ぐらいに編纂することになりまして、それに参加したのですが、その時に大手町にある経団連会館の地下の倉庫の中に眠っていたのがわかって、「廃棄する可能性があるのであれば、大学の

図書館で預かって、整理して保存したい」という希望をお伝えしていたのです。それから数年後に捨てるというお話があって、大学としていただけてきました。

どういう中身かは、レジメの2枚目の紙に「現代史資料としての石川一郎文書」というのがありまして、その次に分類項目別に大きく4つに分けたものがあります。あらかじめお話ししておきますと、この文書はもう既に完全な整理が終わって、目録も作成されています。目録は、いま東京大学経済学部図書館のウェブサイトから画像情報での目録が見られるようになっていました。その上でマイクロ化も済みまして、マイクロフィルムそのものを雄松堂から一般に頒布するということまで準備が進みました。多分、もう販売の広告が出ているはずですよ。

資料の中身は、「現代史資料としての石川一郎文書」に概略解説されていますが、分類項目を見ていただければわかる通り、石川一郎さんという方は戦前期に日産化学という会社の社長をした後で、戦時中の化学工業統制会の会長として化学工業統制に中心的な役割を果たした方で、第二次大戦後には経済団体連合委員会という組織の事実上の座長になって、翌年、経団連が組織される時、会長は当初は空席なんですけど初代会長になった方です。その彼が統制会とか財界の活動の中で受け取った文書等をすべて組織単位ごとにファイルしてあったものです。したがって、たとえば「政府機関関係」とあっさり書いてありますが、その中には戦前から戦後にかけての重要な審議会の議事録がかなりの程度含まれていて、たとえば復興金融金庫の融資に関する審査委員会とか、自立経済審議会という類のものすべてがあります。

これが、マイクロフィルム版をつくる時の宣伝用のパンフレットを雄松堂さんがつくってくれたものなので、細かい内容はそれを見ていただいたほうがいい。読み上げれば2時間済みですけど、ご覧ください（回覧）。これは、ひとつは戦前期の化学工業に関しては、産業史的な興味を満たしてくれると同時に、戦時統制というのは事細かにどんな形で行われていたかというのを明らかにする上で重要な資料ですが、圧倒的に重要なのは、おそらくⅡからⅣの大きな分類に入っている戦後の資料ですね。

経団連会長というのは、当時から「財界総理」なんて言われましたので、そのポストに即していろいろな審議会関係の役職が回ってくるものですから、それに関する文書がかなり集まっています。これは、たとえば商工省・通産省関係の資料でいうと、本省には残っていないような審議会の議事録が残っておりますし、稀に彼の手書きの書き込みがあったりもします。そういう意味で、重要なものです。それと同時に、経団連それ自体の内部の委員会の資料も残っております。これは、内部の委員会で財界人たちがどういう議論をしたか、それによって最終的には要望書のようなものを出しますが、それは当然のことながら審議会、あるいは政府そのものが考えている新しい政策項目に対応しているわけですから、この資料の中でいろいろな政策項目を突き合わせていくと、相当程度、昭和20年代の経済政策の立案過程の細かいところがわかるだろうと思われています。

まだ十分に活用はされていませんけれども、これを私が貰ったのは大学院の学生の時で、その時にはどうにもならなかったものですから、社研の助手を学部の助教授になった当初、3年ぐらいをかけて、今はみんな偉くなってしまった大学院生をこき使って整理したんで

すけど、一応、目録サイト上では目録カード1枚1枚全部画像に取ってありますので、皆さんがもしご関心があれば、図書館のホームページから検索サイトに入っていただくと画像の形でカードが1枚ずつ出てきますので、それをめくっていただければ、どんな資料が入っているか、かなり詳しいところまで想像できる。もちろん、10人以上の手でカードを取っておりまして、人によって粗い人と細かい人といえますけれども、手掛かりにはなるんじゃないか。そういう資料でございます。

経団連に関して補足しておきますと、石川さんの後が石坂泰三さん、その後が植村甲午郎さん、土光（敏夫）さん、稲山（嘉寛）さんと続いていくんですけども、石坂泰三文書というのは現存しておりません。というのは、会長の人柄というより担当の秘書の方の個性だったようで、この石川一郎文書も日産化学の社長時代からずっと個人秘書がついておられて、その方がすべて整理しておられた。同窓会の通知まで全部残っておりまして、そういうものが全部ファイリングされているという資料です。

植村甲午郎に関しては、経団連は若干の資料を持っていると言っておりますけれども、今年の2月に経団連の資料センターに頼まれて、大学院生10人ほどと地下の倉庫全体の資料整理をしてきたんですが、その時点では発見されませんでした。だから、別置されているのかわかりませんが、そういう状態です。それ以降についても、会長個人文書という形で経団連は資料を保存しておりませんが、公式の活動記録については基本的には昭和40年代から以降に関しては、委員会別のファイルという形でかなりの程度残っておりまして、このぐらいの部屋が3部屋分ぐらいファイルがあります。そういう資料が残っております。それも全部リストをつくってありますので、見られるかどうかはよくわからないですが、整理を依頼してきた担当者は「いつでも見せますから、どうぞ」とは言っていました。

最近の四半世紀に関しては、財界団体の資料というのは多分、大丈夫だと思います。もうすぐ日経連との合併が予定をされていますが、資料の廃棄という危険はなさそうだという状況です。ただ、日経連側の資料がどうなるかは、ちょっとわからない。むしろ難しいだろうと思っておりますが、ちょっと手掛かりは今ありません。

同じ財界団体で、戦前からの日本工業倶楽部は、あまり多くの資料を持っておりません。残念ながら建物自身が一昨年取り壊されてしましまして、調査部に戦前期の資料が少し残っていたのですが、重要なものはありませんでした。これは完全にオープンにされておまして、何年かに一度ぐらい見に行っていたんですが、見せていただいた範囲で言うと、戦前期に工業倶楽部が出した意見書にかかわるファイルが60点、70点程度残っていたということで、それも今どうなっているかちょっとわからない。日本工業倶楽部というのは大正6年につくられましたけれども、そのあと日本経済連盟ができてからは財界の活動の主軸はそちらに移ってしましまして、工業倶楽部の主たる活動は経済外交と労働問題の一部だけなので、本当に倶楽部化していきます。

戦後は、完全に倶楽部化してしましたので重要な資料は見つかりませんでした。たださすがだと思ったのですが、たまたまあの建物の屋上にプレハブの倉庫がありまして、そこを見た時に、戦前期の営業報告書というのが埃まみれになって、未整理のまま横積みにな

ずっと積み上がっていたのが見つかりました。もう20年以上前だったと思うんですが。これも同じように「どうするんですか」という話になって、向こうも「いや、こっちも困っているんですよ」という話になりました。

東京大学経済学部の図書館には、戦前来「商業文庫」というカテゴリーがありまして、そこで戦前の会社の営業報告書をずっと収集しています。この営業報告書の収集に関しては、多分日本では東大と神戸大学の経営資料センターというところが二大センターで、それに三菱経済研究所が寄贈したコレクションだったと思いますが、国立国会図書館が同じような資料を持っています。その3カ所が中心になって収集されていたんですが、工業倶楽部の資料のかたまりは、その意味ではまったく新しい発見でした。

ダンボール400箱ありましたけれども、だいたいこういうのは「要らなくなったらください」と言って帰ってくるだけで、あとは返事を待っている。そうすると、3~4年たってこっちが忘れた頃に、「あの話は、どうなりましたか。まだ受け取ってもらえますか」と。要するに、先方の倉庫のスペースが足りなくなった時に返事が来るので、これも同じようなことでした。それでいただきまして、何年かかけて整理しました。結果的には、4枚目に手書きで「営業報告書目録」と書いてある、これもその目録のコピーで、こういうものを出しています（回覧）。

当初、我々が持っていたのは1300社で3000冊ぐらいだったんですが、結果的には800社・1万2000冊という大きなコレクションが経済学部の図書館に入ることになりました。これまで相当程度、欠落があったもの、あるいはわからなかった会社が変わるようになりまして、日本の企業史とか産業史の研究には重要な発見になったのではないかと思います。私自身はこの二つ、両方ともほとんど使ってないんです、整理しただけです。あんまり幅が広すぎて、自分でやるにしても使える部分は非常に限られているものですから。そういった資料ですが、戦前期の企業の基本資料が相当揃ったということです。これも、雄松堂が今、国内にある営業報告書類をマイクロフィルム化していて、「新しいのが出てきたのだったら、ぜひマイクロフィルムにしたい」ということだったので、整理が終わった段階でマイクロフィルムをつくっていただきまして、一般にも頒布されています。我々のほうは、無料で資料全体をマイクロ化することができたという、そういう取引をさせていただきました。

大きなものはこの二つなんです、これ以外に細かいものが幾つか入っておりまして、「過燐酸石灰工業組合資料」というのは、たしか古本屋で箱で買ったんだと思いますが、本当に安い値段でボロボロの資料が入ってきたのを整理しました。これは、戦前期のいわばカルテル組織とか、同業組合の資料でありまして、組合がどういう形で生産を調整したかとか、価格を協定したかというようなことが資料で出てきています。

こういう類の資料は、単発的には幾つか入ってまして、後でお話する同和鉱業が持っている藤田組の関係資料も一部かたまりで、ガリ版で印刷された資料でしたから多分一部が流れたんだと思うんですが、そういったものが入っていると、三井関係のもの的一次資料が入っていると、あるいは昭和電工、八幡製鉄所に関する資料が部分的に入っています。そういったものはほとんどが図書扱いで、図書館の中で整理されて収蔵されてい

ますから、現状ではオンライン上の検索は完全ではありませんけれども、そういったものから見ることはできますが、一見すると図書のように見えますが、実際に手をとってみると一次資料であるというものが、かなり大量に図書館には見られます。

伊藤 経済学部の図書館ですか。

武田 はい。八幡製鉄所や昭和電工というような企業資料が入れてあります。

その他、経済学部には文書室というのがありまして、僕らは「モンジョ室」と呼んでいるんですけど、学部内ではだいたい「ブンジョ室」と呼ばれてしまっていて、「いや、あれはモンジョ室なんです」と言っているんですけど、経済学部ってそういうところなんですよ（笑）。文書室がありまして、そこでは土屋喬雄先生以来、近世期を中心とした歴史文書を集めるということをやっています。土屋先生は、だいたい集めてきて積んどいて、ほとんど整理してくださらなかった。次の山口和雄先生もほとんど整理してくださなくて、石井寛治先生以降に整理が始められたものが幾つかあります。

最初の目録ができたのは、「白木屋文書」です。これは、林玲子先生が中心になって整理していますが、いまや白木屋といっても誰もわからないかもしれないですが、株仲間帳など近世期の資料です。実は、これがこの文書室でいちばん使われている資料ですけども、そういったものがございます。

それから二番目は、南山城の上粕村というところの大庄屋の資料で「浅田家文書」。これは近世の初期から昭和初期ぐらいまで一つの家で持っていた資料全体の、おそらく80%ぐらいの現物があります。購入したものなのですが一部散逸して、国立史料館にあります。それから、売却されずに地元の浅田家そのものにもまだ残っているものがあります。そういったものは、マイクロにして一カ所に文書室に全部集中されています。既にこれに関しては南山城地域史の研究に関する本をつくったんですけど、自分で書いた本の書名（『近世・近代の南山城』）を忘れちゃいましてね。東大出版会から一冊、研究書が出ていますけれども、かなり長期にわたって一つの家がわかって、私が担当した近代期に関して言うと所得調査簿というようなものが残っておりまして、その村の階層別の営業規模とか、所得がわかるという資料として、重要なものです。

伊藤 明治以降、この家は何をしているんですか。

武田 村の役職についている時期もありますけれども、基本的には名家として残っていて、地主ですね。商業には携わっていないように見えますが、分家がお茶をやっています。

それから、次の「土屋家旧蔵文書」というのは、土屋喬雄先生が集めた資料を頂戴して来たものです。

伊藤 この「土屋」は、同じなんですか。

武田 土屋喬雄家が持っていたものです。土屋先生が買った資料は、文書室にあるもののほかに御自宅にもあった。土屋先生のご自宅のあちこち開けてみると次々と出てくるという感じで、亡くなられた後で土屋先生のお宅に調査に入ったんですけど、ご家族もわからなくて、「あそこを開けてみたことがないんですけど、開けるとどうなるか」といって開けると、たいてい古文書が出て来た。それ以外に庭に別棟で大きな書庫があったので、そこから出てきた文書を合わせて整理したものです。ですから、これは土屋先生のお宅の文書というよ

り、土屋先生の家が集めた古文書です(笑)。どうやって名前をつけるか、ちょっと苦労したんですけども、結局土屋先生の家が持っていたということで、「土屋家旧蔵文書目録」としてまとめまして。先ほどの営業報告書の次に解題の部分をコピーしてありまして、これですね(回覧)。

いろいろな形で文書がありました。文書の2枚目以降を見ただけであればわかりますが、全国各地津々浦々だけど、ひとつひとつの件数はそんなに多くないんです。中心は、ここにおいでの方が関心をもっている時代というよりは、むしろもっと昔の時代のものが多いです。ただ、最後のほうにありますように、日銀資料、大蔵省資料、小菅丹治(伊勢丹)資料、商工行政史関係、それから明石照男、貨幣関係というので、目録で言うと153から166にかけて量はそんなに多くありませんけれども、土屋先生ご自身が関係しました日本銀行、商工省、大蔵省、あるいはこれは伝記のために携わったんですが小菅丹治といったものに関わった資料も少し残っておりまして、近代史の資料として多少役に立てるものが残っているのではないかと考えております。

日本銀行の関係の資料は、現在、日銀がかなり積極的に資料公開をし始めましたので、そちらで直接見ることは可能になっておりますけれども、後でお話ししますように商工行政史関係の資料は公開がストップした状態になっておりますので、こちらにあるものを少し手掛かりにして資料を開けていただくというようなことが一つのステップになるかなとは思っています。そういったものです。

それから、最後の「カネニ小松史料」というのは、いわゆる諏訪の製糸業者の経営史料で、これがいちばん最近できたものです。これもちょっと雑多な史料なんです。購入した史料であろう……あろうというところが危ないんですけれども、じつは一昨年から富善君という文学部出身で史料に詳しい人に文書室に来てもらいまして、整理を始めているんです。彼に、この史料を最終的に仕上げてもらったんですけれども、目録をつくる段階で、「武田先生、この文書はどうやって手に入れたのか調べてくれ」と言われて、「俺は知らない」と(笑)。一所懸命調べたんですけど、いつ頃か買ったらしいということがわかって、大学というのは、こんないい加減なことをしていいのかなと思っています。どこから、幾らで買ったという書類がまったく残ってない……オフレコにしておいてください(笑)。

こういう、すぐに整理できない史料のようなものは、どうも図書館では消耗品のような扱いで一回買い取ってしまって、整理した時点で登記するようなんです。そうすると、当初は消耗品の伝票で切れていますので、消耗品の伝票はそのまますぐなくなってしまうのでちょっとわかりませんが、私の記憶では70年代の中盤ぐらいに、当時大学院生だった東條由紀彦さんとか、花井俊介さんという製糸業を研究している人たちがいたものですから、石井先生がどこかから見つけて来て購入したんだろうと思う。買って来た記憶はあるんだけど、いつだったかというのはわからないという状態です。

でも、これはひとまとまりの経営の史料としては、わりと貴重なものです。ご承知のように製糸に関しては、岡谷に蚕糸博物館というのがありまして、ここにいわば資料がかなりの程度、集められております。もし製糸業関係の資料にご関心があれば、最初にそこに行っていたのが常道だろうと思うんですけども、そういったものと対になって補足

した資料として出てきているものが、この小松組の史料でございます。

これに類似したものに、実はここに書き出せなかったんですけども、麻生家の文書というのがまったく未整理でありまして、これも確か長持ち1個分ぐらいなんです。我々が手に入れた時点で、どうも一回人手に渡ったものがもう一回古書店に入って、それで出てきたものようです。その前に買った方が、切手の蒐集家だったらしくて、書翰類とか全部ほどいて、切手が貼ってあるものだけ全部はがして廃棄したという状態なので、残念なことにもととの資料がどういう形でバインドされていたかという原形がまったくわからなくなって、中身も封筒と別にされているものがずいぶんあるものですから、ちょっとお手上げの状態なんです。で、「なかったことにしようか」という話をしているところで(笑)、本当に困っている資料です。そういう意味では、入手の時点で、僕らが慎重さを欠いたという面もあります。いずれ何らかの方向で時間をとってやりたいと思っています。そういった類の資料も入って来ております。

そのあと3点ほど書いてあるのは、経済学部文書室とは別に資料室という部屋があります。この資料室というのは、制度的にいうと経済学部には付置されている日本経済国際共同研究センターというのがございまして、その国際共同研究センターの研究活動を支援するために、日本の経済に関する資料を収集し、整備して公開しています。皆さんが行かれると、図書館の中の一部にそういうものがあって、目録も一体になっていますけれども、そこを検索されれば、あまり意識されずに図書館の資料と資料室の資料をお使いになることができるんですけども、組織的にはそういう所があります。

そこは、主として昭和期とか戦後期に比較的まとまった一次資料を受け取って整理しておりまして、その成果が最近3つほど公開されました。1つが、「戦時海運関係資料」でありまして、99年8月に目録が刊行されています。それから、2ヵ月遅れて「国労関係資料」が公開されています。「戦時海運関係資料」については、主として原朗さんがやられたので、私は具体的な内容はよく知りませんが、ここに解題の一部をコピーして皆さんのほうにお配りしてありますのでそれを読んでいただければと思いますが、海運統制に関する資料でございます。原先生は、この会に一度おいでになってお話しになってはいますが、ちょうどこれをまとめておられる時期ぐらいだったように思います。

国労関係の資料のほうは、労働関係の資料ですね。ご存じの方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、実は大河内一男先生がいらした頃から、東大の経済学部と社研が共同して労働運動資料とか労働問題関係資料の収集をして、『日本労働運動史資料』という全10巻プラス1巻という、かなり大規模な資料集の計画があって一部刊行されたんですけども、4巻から7巻ぐらいまでが出てないかな、かなり中途半端な形で刊行が終わっているんです。どうなっているかは、よくわからないんですが、ごくごく最近、その資料収集のためにつくったであろうと思われるカードが、東京大学の某所でゴミのように捨てられているのが見つかって、飛んで行ったけれどもどうにもならなかったということがありました。事実上その活動は止まっています。新しく資料集が刊行される可能性はほとんどないんですけども、その時以来、労働問題に関する資料というのは組合資料を中心に、かなり丁寧に社会科学研究所と分担しながら集めております。その中で比較的まとまりが

あって出てきたのがこの国労の関係の資料で、ご承知のように国鉄民営化でJRに移転するようなどころに関わって、国労自身の組織の継続性があやしくなって会館を売却するというようなこともあって、資料の保管場所が問題になった。そのときに、それまでおつきあいのあった先生たちとの間でお話があってお引き受けになって、佐口（和郎）先生が中心になって整理をしたものです。

3つ目の「浜田徳海資料」というのは、去年でしたかに目録が刊行されています。これは、昭和財政史に関する資料と対になるべき資料だろうと思うんですけども、主として税務業績に関わっていた大蔵省の事務官が残した個人文書をいただいて整理したというものです。特定の時期ですけども、かなり細かい税制改革に関わるような内部文書が含まれておりまして、その意味では大変貴重な政策文書ということが出来ます。私自身は、細かいところまで見ておりませんので、あまり詳しいことは申し上げられませんが、そういった資料があります。

ここまでが、基本的に我々の方針としてはできるだけだでもらってこようと。ただし、自分たちで汗をかいて整理をしようということなんですけども、可能であればマイクロにして公開できるようにしよう。一次資料を見せるのも別に構わないんですけども、傷みとかいった問題があるのでマイクロ化しようという努力もしてきましたが、それと同時に、ここでご回覧いただいているように冊子体の目録をとにかくつくって、情報をできるだけ多くの方にお知らせしようという努力をしてきたものです。その上で、最近は図書館のホームページが開設されましたので、そこにリンクを貼って、目録をつくる時につくったデータを加工してウェブサイト上で検索していただくことができるような形式をとるようにしております。「石川一郎文書」、「日本工業倶楽部・営業報告書」、「浅田家文書」、「土屋家旧蔵文書」、「戦時海運関係資料」、「国労関係資料」、「浜田徳海資料」までは公開されていると思います。

今のところ、小さいものでは「過燐酸石灰工業組合資料」のようなものはOPACから入っていただくようなもので、「カネニ小松史料」はまだ公開のための準備ができていません。多くのはそれぞれの先生方の研究室からインターネットにつながっていれば、研究室で検索をしてどんな資料があるかを見ていただくことができるようにしておりますし、資料の所在情報というか、東大が持っている情報については皆さんが、探すというウェブ上で遊ぶ時間さえあれば、知っていただくことは可能だと考えています。

この他にもいろいろありますが、これからも順番に整理を進めていきたいと思っております。抱えている案件もずいぶんあります。しかし、この2年ほどの間に実は大型の資料がボンボンと出て来てしましまして、ぼちぼちやっているのではとても間に合わないという状況が発生して、とてももう私たち資料好きの教官が数人集まって、個人的に暇を見つけては整理するという状況ではなくなりつつあります。その辺を、次の3のところでお話ししたいと思います。

「3. 整理中ないし未整理中の収蔵史料」ということで、そこに主なものを4点ほど出してございます。先ほど来、ちょこちょこ出ている小さいものは全部省きまして、大きいものだけですけれどもかなり重要な資料があります。

「東洋経済調査部資料室資料」は、昨年の春に東洋経済の調査部からトラック 2 台分の資料をいただいたんですけれども、中心は工業倶楽部資料を補うような営業報告書類でございまして、四百何十箱のうち、現在調べた範囲で言うと残す必要があるのは 70 箱程度で、300 箱以上ゴミを貰ってきた状態になりました。

伊藤 前のと重複しているという意味ですか。

武田 そうです。商売するわけにもいかないんで、古書として売り渡すには半端なものが多いものですから（笑）。

基本的にはどうしたかという、我々のところの大学院生を中心にして、自分の研究分野で産業史をやっている研究に使うという申し出のあるものについて、重複資料はさしあげるといことをしております。そういう形で、幾つかの図書館の資料の廃棄物をいただいてきて整理はしているんですけれども……。

その話が出たついでに、余談をちょっと。図書館とか企業の調査部が資料を捨てるという例が、間欠的にですけど何回か起こって、その資料がかなり大規模に、捨てられるのを救えたものもあるんですけれども、救えなかったものもあります。我々のところで言うと、カテゴリーとして三菱本というものがあります。これは、三菱が持っていた本ですけども、正確には三菱経済研究所の調査部の図書室が持っていた資料がありまして、私が着任するよりずっと前ですから、多分 1960 年代ぐらいの時期か、あるいは 70 年の初頭ぐらいの時期に東大の経済学部へ寄贈されたものと思われるものがあります。これは、救えたほうのものですね。

それからもうひとつ救えたものは、横浜正金銀行調査部図書室が持っていた図書というのが、昭和 30 年（1955 年）ぐらいに東京銀行の調査部が「戦前の資料は要らない」というので廃棄したものがあまして、たまたま東洋文化研究所と正金銀行というのは、正金銀行の活動が東アジアから南アジアにかけて、かなり中心に業務している関係もあるんでしょうが、ずいぶんご縁があったらしくて、その当時寄贈していただいてありました。整理に着手したのは実は 5 年前で、整理が済んだのは 3 年前です。ひどいことに、40 年ぐらい放ってあったんですね。

東洋文化研究所の所員の人たちが「東銀本」と称していましたが、「東銀本」の中で自分の使うものが見つかる、ひっぱり出して来て図書館の職員に「登録しろ」と言ったというので、実は 1995 年ぐらいに経済学部と東文研が共同でこの「東銀本」の整理に入った時には、「東銀本」の原形がわからなくなっていたんですね。つまり、40 年にわたって所員がつまみ食いをしていましたので、書誌学的に言うと横浜正金銀行の調査部というのはどういう書籍を集めていて、それをもとにどんな調査活動をしていたかという、書籍の全リストがわかるというのはすごく重要なことなんです、実はそれを復元できない状態になっていました。

そこで、それはもう諦めまして、その時点で東洋文化研究所の業務に必要と思われるアジア関係の資料は東文研に、それ以外のは経済学部へ引き取るという形で整理しまして、これも重複本がかなり出ましたから、さっき言ったように大学院生に肉体労働を提供した報酬としてさしあげるとい格好で処分しました。それでもやっぱり横浜正金銀行み

たいな国際機関になると、1890年代ぐらいからの外国貿易統計に関するイギリスの統計が毎年きちっと全部残っているとか、フランスとか主要国の商業貿易統計がきちっと揃うんです。その意味では大変重要な資料で、これは経済学部としては図書として整理ができたように思います。

最近になって、完全に救うのに成功してないのが、通産省の図書館が経済産業省への移行を念頭においてだと思っんですが、4年ぐらい前から蔵書の整理を始めてしましまして、すごくいい加減な図書館なんですよ。「昭和45年以前に登録されたものは、不要本とみなす」というので(笑)、これには呆然としました。

それ以前で唯一残っているのが、吉野信次さんという有名な役所の人がありますが、彼が産業合理化運動に関わって購入した洋書が、吉野文庫という格好で残っていたんです。それだけは助かっているらしいと聞いていて、確認はしていませんが、それは外へは出ませんでした。働きかけまして、「捨てるんなら、とにかく全部ください」ということで、いったいどのぐらいの分量になるかわからなかったんですけどもお願いしたんですが、通産省の方針で、まず省内で欲しい人がいたらその人にさし上げるというのをやってしまったので、かなり重要な資料が個人の好事家の手に渡ってしまいました。

その後、古書店に出てくるのかどうかわからないんですが、たとえば我々の知っている範囲で言うと、大正の初めに製鉄業関係の特別の委員会があって、その議事録「録事」というのが一冊本なんですけど、そこにしかなかったやつが一つあるんですが、見事にそれは抜かれてしまいました。その後、残り滓になった部分で捨てるはずのものを「東京大学経済学部は、ゴミの処理業もやります」という顔をして全部送っていただいて、重複の調査をして、重複してないものについては図書館として受け入れましたけれども、残念なことにそういう意味では重要な資料が手からこぼれてしまったということも起こりました。これは一次資料の話ではありませんが、図書館としてはそういうことが起こっております。幾つもそういうことに出合うのですが、最近もある銀行が資料の調査をして、捨てる準備をしているという情報が流れておりまして、そんなようなことでございます。

そういう関係の中で、多少とも我々のところに預けるとちゃんと整理をしてくれるということを知っておられる方もいらっしゃるようで、声をかけてくださるということもあって、そこにあるような「東洋経済調査部資料室資料」とか、「横浜正金銀行史料」とか、「閉鎖機関整理委員会資料」というのが入ってきております。

東洋経済調査部資料は、先ほどもちょっとお話したように営業報告書が主でしたけれども、予想しない掘り出し物が出てまいりまして、これは初め何だかわからなかったんですが、昭和20年の「APO500号指令に基づく鉦工業調査報告書」と日本語には書いてありました。ただ、APO500というのは文書の題名ではないらしくて、最終的にわかったのは、マッカーサー司令部が上陸してきてすぐ、日本のおそらく賠償の可能性を調べるために鉦工業会社の現在の生産設備なり状況を調べようとしたんだと思います。その指令が9月に出ておりまして、それをもとにして商工省令が10月1日付け、戦後の「商工省農商省令第1号」というので戦後の第1号ですけども、省令で鉦工業会社の事業報告書を出させているんです。

実は、私はこの資料の存在を知らなくて、戦時期から戦後期をやっている方にも聞いたんですが、「そんなものがあつたとは知らなかつた」ということなんです。実際、何を調べているかという、会社の履歴ですね。何時つくられたとか、資本金は幾らだとか、株主は誰であるとか、金融機関との取引関係はどうなっているかということとか、それから「過去10年間の財務諸表の数字を出せ」とかいうようなことで、このぐらいまでは先ほど来ご説明しているように、営業報告書とか社史とかでかなりの程度カバーできるんですが、いちばん面白かつたのは過去10年分の生産の実績を報告させています。うまいこと、「戦争で資料が焼けたので報告できません」と書いている。要するに事実を隠しているのか、本当にないかわからないですけども(笑)、そういう報告書もあるんですが、かなりそういう生産実績がわかるものがあります。それからもうひとつは、その当時の個別企業レベルでの設備の状況。どのぐらいの生産能力を持っているか。これも、通常わからないデータなんです。この2つがわかるようになりました。さらに、その企業が戦争が終わって何をつくるつもりかという生産計画のメモが入っています。この3点ぐらいは、1945年の10月時点で日本の企業はいったいどういう状況にいて、何を考えていたかということを知る上では大変重要な資料でありまして、その意味で大変掘り出し物だつたように思います。

何故それが東洋経済にあつたかというのは、非常に不思議なんです。調べた範囲で言うと、政府宛に英文で1通と和文で3通提出されていますので、英文の1通はおそらくGHQに出されて、今頃はナショナル・アーカイブかどこかに眠っている可能性がある。国内に出されたものの一部が東洋経済に出ているのは、おそらく東洋経済が『昭和産業史』という3巻本の大きな書物を出しています。これは、出版社が企画してつくつた本としては、戦前から戦争中にかけての生産数量等のデータをかなりはっきりと出しているめずらしい本で、この時期を研究する上では最初にきちっと読まなければいけない書物なんですけれども、どうもその書物の元のデータに使われたんじゃないか。だから、そういう計画ができた時に、当時の通産省なりが書類を渡して協力したのではないかと推測はされます。それは推測でして、元来『昭和産業史』であれだけ細かい兵器の生産額とか、戦争中の機械の生産額がなぜわかっているのか、多少疑問だつたんですけども、この45年10月の文書の所在によって、ここで記録が残されているとすれば、それを直接に使わないにしても、おそらく何らかの形でそうした生産数量を復元する可能性があつたのは間違いないだろうということがわかります。

伊藤 石橋湛山じゃないですか。

武田 石橋さんが口をきいて、持っていったかもしれません。

伊藤 石橋さんが通産大臣をやつて、この時データについてもものすごい執着があつたようですから、その可能性があるんじゃないかなあ。

武田 と思いますけど。逆にいうと、通産省は執着のないところですから、必要だと言えばすぐ出しちゃつた可能性があるんです(笑)。とにかくそういう掘り出し物がありました。

伊藤 これは、どういう形のものですか。

武田 基本的には、A4サイズほどのタイプライター用紙に近いものに打たれていまして、

平均的には1社あたり20ページぐらいの報告書ですね。それぞれの会社が、要求された項目AからHぐらいまでの、会社の名前、代表者の名前等を全部書き出したものと、財務諸表、生産実績計画というようなものです。

伊藤 タイプに打たれたものですか。

武田 手書きのものもありますし、タイプのものもあります。

伊藤 じゃ、本当の原文書なんですね。

武田 完全な原文書です。保存状態が非常に悪くて、政府に出す文書ですからそんなにひどい紙を使っている会社はないんですけども、もともとそれが重要な資料だということを寄贈している側も認識していませんし、こちらも開けた時点で何だかわからないまま、違うものが出てきたという状態だった。よくわからないんですけども、どうも保管の途中で箱の入れ替え等を何度かやっていて、完全にバラバラになっているのが幾つもあったんです。会社ごとではなくて、綴りが切れてしまっているとか、表紙が飛んでいるものとか、後ろがないものは、全部で3000社出てきているうちの400社とか500社に出てきてしまっている。それを、字体とか、使っている紙とか、どこで切れているかとか内容とかで突き合わせていって、最終的に三十幾つどうしてもわからない断片が出てしまいました。状況としては、そういうものです。

それではちょっと状態が悪すぎるものですから、先行してマイクロにしようということで、いまマイクロ化を進めておまして、マイクロフィルムができ上がったら皆さんにお見せできるように一般公開しようと考えています。1945年10月時点での鉱工業の製造会社だけ、たとえば商社とか持ち株会社といったことは一切含まれていない3000社ですから、中心はみんな機械工業に寄っていますけどかなり高いカバー率で、当時の産業企業の実態を知ることができる面白い資料だと思っています。何人かが、いちばん最初に分析したいと言ってきているんですけど、どうなるかわかりません。とにかくそういうものです。

それから2番目の「山一証券経営史料」は、おそらく皆さん興味は非常におありになるだろうと思うんですけども、山一証券が破綻してもう3年近くになりますか。その当時、新聞にも出ましたけれども、この会社は社史の編纂をやっていたんですね。山一は100年になるものですから、100年の社史を編纂して、それに我々の同僚の伊藤正道さんとか、粕谷誠さんとか、あるいは当時社研におられた橋本寿朗さんとか、東大の関係者が何人か執筆者として参加していたんですが、ああいうことになりまして社史が出ないことになりました。最終的には、普及版だけが出ているようなんですけれども、その過程で利用していた会社史のいろいろな史料とか、会社が閉鎖されることによって散逸するおそれのある資料というものがずいぶんありました。同時に調査部の図書というのも残っていて、それも、どうするかということがいろいろ議論になりました。

破産整理なものですから、管財人のほうから「もし売れるものだったら、とにかくお金にして、債権者にお金を払わなければいけないんだから、金になるのか」と訊かれて、とにかく買ってくれるところがあったらそれを優先するという条件で交渉に入りまして、最終的には図書については売却処分が決まったようですが、一次資料に関しては東大経済学

部であれば預けてよろしいということで、預かることになりました。ただ、いま我々が預かっているのは完全な資料ではありませんで、まだ一部、特別検察庁のほうで預かって調査中のものがありますので、微妙なやつはまだ向こうにあります。ただ、1965年の証券恐慌の時の山一の破綻の事情の資料といったものを含めて、原則として一次資料の経営資料は一応全部経済学部でお預かりして、おおまかにいま受け取った分までは整理が済んでいます。

ただしこれは、ちょっと微妙すぎる問題があって、いま公開できる状態にはない。私も中身まで検討していませんが、めずらしいと思います。破綻企業資料が手に入ったという、おそらく何年か経てば証券業史、あるいは90年代の日本経済を議論するとか、あるいは金融行政を議論する上で重要な手掛かりを与えるようないい資料群として、お使いになれるようになるんじゃないかと思います。

伊藤 似たような話ですが、長銀の調査部資料が売りに出たというか、私にも「買わないか」という話があったんです。買ったかったんですけども、「調査部についている身障者を一緒に引き取ってくれ」という条件だったものですから、ちょっともたもたしている間に、埼玉県立大学が確か学校設立のためにうちが引き継ぎたいとあって、あそこは福祉もやるわけですから身障者も引き受けるというので、遂にさらわれてしまいました。残念なことをしましたが、破綻企業の、とくに調査部。

武田 長銀の調査部資料だとすると、図書だと思うんですね。経営資料じゃないと思います。

伊藤 ただ、調査資料の中にいろいろ入っているという話ではありました。

武田 それから、そのあと2つが最近入ってきた大物でありまして、ちょっとこれは手に負えないで困っているんですが、一つは「横浜正金銀行史料」です。横浜正金銀行という会社についてご説明する必要はないと思いますけれども、横浜正金調査部の資料は1955年に処分されて東大に入っているというお話はしましたけれども、経営本体の資料は東京銀行に継承されて、ごく最近まで完全に保存されていたわけです。それが東京三菱銀行になって以降、さすがに「横浜正金銀行史料」を三菱銀行として持っている理由はないと。要するに、この合併が吸収合併だったということと、それによって発生している行内の発言権がどういうものであるかというのを、資料の行方が如実に表していると思うんですけども（笑）、「もう要らない」ということになりました。

銀行それぞれあるんでしょうけれども、東銀というのは東銀マンという人たちがいて、その資料の保存運動を始めたんですね。彼らが全部捨てるのは勿体ないので、重要な資料だけ40箱分ぐらいを選んで、あとは捨てるでもいいというようなところまで東銀の本体と交渉してやっていたんですけども、どうも捨てるのに忍びないということで、これも前のご縁があって東文研にお話がきたんです。ところが、東洋文化研究所も50年経つとずいぶん態度が変わっていて、「そんなもの要らない」と言ったんですね。

ただ、図書館の方は情報を流してくださって、「経済学部で引き取る気があるんなら、仲介しますよ」というお話をいただきまして、引き取れるかどうかは別にして、捨てるなんてとんでもない話だから、とにかく止めちゃえという話でお願いに上がりました。結果的

には、東京三菱銀行のほうに保存する予定であった三十数箱のコアの資料を含めて、すべてを東大の経済学部でお預かりすることができるようになりました。

伊藤 お預かりというのは、寄託という意味ですか。

武田 東京三菱としては所有権を主張しておりません。今の状態は大学の所有物としても登記されていない状態なので、形の上では寄託されているというか、預かっているとしか言いようがないですけども、そういったものです。これは幸いなことに、かなり大雑把なリストがこんなにあります、箱単位で「こういうものが入っているはずだ」というリストと一緒にきているんですが、まだ「はずだ」ということと事実がそうであるということとは確認できておりません。

初期の横浜正金銀行のロンドンとのやりとりとか、本店での経営報告といったものを含めてありますし、各支店ごとの半期報告とか、あるいは支店との電報を含めた通信のやりとりといったものは、すべて一応残っております。これは、電信も手紙のやりとりも入っていますから、あるいは役所とのやりとりも入っていますので、外国金融業務を中心とした金融史の史料としても面白いですし、正金銀行というのは活動のある局面では大変生臭いこともやっておりますから、政治史的な出来事とか、そういったことに絡んで情報が出てきている可能性はあるんですが、なんとも言えません。というのは、まだ何も見てないわけですね。とにかくいただいた手書きのリストを電子情報にしようというので、人に頼んでやってみたんですけど、いっぱい誤字があってあんまり回したくないものです。僕も訂正する暇がなかったのできょうはそのまま持ってきて、わからないところは真っ黒にしてあったり、いろいろしてありますが、大変面白い資料なのでご覧ください（回覧）。

これは、箱単位であります。おそらく一つの会社の、いわば全史ですね。創立から解散までの全体にわたる企業資料が揃ったというのは、山一証券史料を含めてかなりめずらしいことで、一つの機関にあるということもめずらしいことだと思います。横浜にしても、東京にしても、震災と戦災の影響を受けてはいますので、資料散逸というのがその時期以前のものについて多少あることは間違いなくて、リスト上でも、分厚いのは昭和期から戦時期にかけて、東南アジアの各支店とのやりとりが1冊ごとのファイルでまとまっていたり、出ておりますので、一体どんなものが出てくるのかわかりませんが、面白い資料なので老後の楽しみにはしてあるんですが（笑）、なかなか老後というか暇にならせてくれないものですから。

ちょっとこの分量あると、1週間に何時間かだけ時間をつくってというのは、できないんですよ。だから、研究プロジェクトでお金をいただいて、人を雇いながら、現物を確認しながら整理をし直していくということと同時に、古い資料がありますので、製本とかそういったことを含めて、保存のための措置をとらなきゃいけないものですから、手をつけかねているところです。「こういうものがあるよ」と言うと、使うけど整理しないというジコチュウの人が必ず出てきて、つまみ食いされてしまうと後が大変なものですから、ちょっと慎重に構えているということです。

伊藤 逆に、「お手伝いしますから」という人はいないですか。

武田 いないですねえ（笑）。今、若い人で金融史をやる人があんまりいないんですよ。

産業が多いですよ。

鈴木 金融史をやるのは、一世代上の人ですね。

武田 そうなんです。鈴木さんの前後ぐらいには何人かいるんですが、若い人っていないものからです。「これでドクター論文を書けるよ」と言っても、なかなか食いついてこないんです。とにかく汚い資料ですからね。それと、一次資料は皆さんご承知のように手書きのものが多いため、読むのに明らかに時間がかかるわけですね。もうちょっとまとまっていると着手するけど、700箱全部見るというのはとんでもない話なので、それは難しいかもしれないと思うんです。でも、なんとかしたいとは思っています。

でも、これは何とかかなるかなと思って受け取ったんですが、そのあと出てきたのがとんでもなくて(笑)、これは本当に、正直いって泣いています。泣いていますけれども、でもよかったなとも思っておりまして、「横浜正金銀行史料」をいただいた時に担当の方と少しお話をしている、「横浜正金銀行の史料は、これで全部なんだろうか」というお話をしたんですね。そしたら、「いや、大蔵省に出したものが、もしかしたら大蔵省のほうにあるかもしれないんだけど」という話があって、大蔵省にあるのかなという話になりました。それで、先方の方が情報を集めてくださったんですね。そしたら、たまたま「いや、かなりまとまった資料があるんだけど、どうも捨てることになっているらしい」というお話がありました。

ここから先は、もうある種の藪の中で、言った・言わないという話になっていまして、NHKの報道と、『アエラ』の報道と、日経の報道と、財務省の最近の記者会見と、私の言っていることと全部違ってきますから(笑)、なんとも申し上げられないんですが、ともかく保管に困っている財務省の資料があるという情報が入って、「じゃ、見せてください」とお願いしたら、千葉の谷津というところに倉庫があって、そこに残っている資料なんだということでした。

結果的には、閉鎖機関整理委員会という戦後に持ち株会社整理委員会とか証券処理協議会と同じようにつくられた独立行政委員会の一つで、戦時期の統制機関とか、戦前以来の国策会社とかを、経済民主化政策の一貫として閉鎖して清算整理をするためにつくられた機関の一括した資料が出てきたわけでありまして。(「閉鎖機関整理委員会資料」)

どういう機関が含まれているか。そこにありますように、ビッグネームで言うと満鉄(南満洲鉄道)とか、東拓(東洋拓殖株式会社)とか、戦時金融金庫、満洲重工業(開発)とかありますし、交易営団の資料とか、国民更正金庫の資料とか、およそ倉庫1つ分。谷津の倉庫にはその資料しかありませんで、しかも普通のダンボールじゃなくてリング箱のこんなでっかい木箱で、箱だけでも重たいというやつだったんですが、その頑丈な箱で400箱ぐらい残っている……。

伊藤 4000箱じゃないですか。

武田 4000箱ですね。もう、どうでもいいんです(笑)。正確にいうと、谷津にあったのは3700箱で、四谷の倉庫にそれ以外に400箱ぐらいダンボールでありました。それから、未整理状態で霞が関の大蔵省の地下の倉庫に200箱弱分ぐらいありました。リング箱換算でそんなものかなと思うんですが、それぐらいの資料でございます。

とにかく1999年度予算で廃棄の予算がついているので、大蔵省としても遅くても5月の連休ぐらいまでには結論を出さなきゃいけないということだったので、まず置く場所を探したんです。普通に6段ぐらい積み上げても、中学校にある体育館全部をみっしり占めるぐらいあります。移した時には、箱を開けるのが面倒なので、みんな箱の上を走り回っていました。頑丈なんですね(笑)。で、一番上の箱だけ開けて「これは何だ」とやっていたんですけど、かなり広い場所が必要だということで、営業倉庫を借りるといったい幾らかかるかとか、そのお金の手当てがつかうかというようなことをやったんですが、最終的には……ここだから話していいですよ。都立大学の図書館の一部が、まだ未使用の状態です。空洞が残っていることがわかって……。

伊藤 それは、山崎さんが入っているからいいんじゃないですか。

武田 ええ。山崎志郎君のところ、都立大学図書館長が私の知り合いでもあったものですから、お願いして一時貸していただくということになりました。そこに、4トントラックで34台、キャラバンで3日間かかったのかな(笑)。とにかく経済関係の資料って、出てくる時にとんでもない量が出てくるんですよ(笑)。手紙1本出てきて喜んでいてという世界では必ずしもないんです。これはいちばん困っているのは、資料が玉石混淆なんです。この資料の所在については、原朗さん達が『昭和財政史』を編纂した時点で既に所在は知っていて、一部ご覧になったようであります。そのために、先ほど言ったように四谷の倉庫とかに分置されているものがあつたんですけれども、そこでちょっと問題が発生しているんですが、原形がちょっと崩れているんですね。しかも、原さんの表現によると、「非常に重要な経営資料もあるけれども、極端に言うと整理委員会が注文したそば屋の伝票まで残っているぞ」という話なんです。

そこまで現物を確認したわけではありませんが、整理委員会というのは業務を簡単に説明しちゃうと、要するに閉鎖が決まった機関の経営資料を受け取って、その債権債務関係をほどこきながら清算業務をするわけです。したがって、たとえば銀行のようなものと、預金者一人ひとりに対して必要であれば預金を持っている資産で返却していくという業務をしなきゃいけません。それから、国民更正金庫とか交易営団のように、いろいろな形での取引関係があつて債権債務関係があると、それを一つひとつほどこいていって、債権を回収し、債務を返済するという業務にしていく。そうしますと、たとえば私が預金者だったとしますと、それを何度かに分けて返してもらわなければならないわけですが、その度に「印鑑証明書が必要であり」というような書類が全部残っていて、幾ら返したという伝票が残っていてというのが累積されています。

これは、そのプロセスの資料に関しては、そんなに重要ではないという問題が一つ、「私の預金はどこで幾らあつたか」ということは、公開できる情報なのか、プライバシーの問題に属するのか、ちょっと微妙な問題があるということがもう一つ問題です。そこで、その部分と同じような情報というのは当然のことながら、どういうふうに残したらいいか、あるいは残さないで済ませようかという判断が要求されてくる。

それから、そういう業務をしていく上で、当然コストがかかりますよね。何人か人を雇っていますし、紙が必要だったり、鉛筆が必要だったり。その書類があるわけですよ。し

かも、ひとつひとつの清算業務に固有に経費をつけていきますので、たとえば交易営団の資料の中に紙を購入したとか、印鑑を新調したというような経常的な経費の伝票まで、これはさすがに要らないだろうと思うんですけど、それをどうやってより分けようかということが、難しくてちょっとわからないんです。我々としては、とにかく汚い話ですけど、今も箱の中にネズミの糞とか一緒に入っていますし、埃もひどかったものですから、今ほとんど全部を開けてまして、箱の入替えをして、埃を取って、とにかく手で触れられる程度の状態にまではしておいてあって、グループを作って一部の資料の研究を始めているところなんですけれども、将来的にはある程度デジタル化して、収蔵のスペースを減らしながら、コアの資料の現物を残したいと思っています。

あとの問題はお金だけなんですけれども、日本経済新聞に記事が載ったおかげで、「もしかしたら金になるかもしれない」ということなんですか、幾つかの書店とか、会社が「うちに仕事をくれ」と言って来ていますけれども（笑）、これは見通しがありません。私のほうでは、こちらは一銭もないから、画像をデータ化して売っても構わないけど、きっちと画像をデータ化してくれるならそれもいいかなと考えているところなんですけど、ちょっと何とも言えないですね。（注：2002年4月～8月にかけて全ての資料が国立公文書館に移管され整理されることになった〔後日談〕）

いちばん面白かったのが、こういう情報を皆さんに伝えても意味があるかどうかわからないですが、インドの会社からオファーが来ました（笑）。その会社は、オランダとイギリスの企業に対して、企業の社内文書のデジタル化をやっている。だから、「海上輸送に適したコンテナで送ってくれば、CD-ROMにして返します」ということで、関係者が「面白いですね」というメールの返事を出したら、この間やってきまして（笑）。面白かったです。6メートル四方ぐらいのコンテナですかね。ダンボールを詰めると小さめで1000個、大きめで500箱入るんだそうなのですが、500万でやりますと言っていました。

伊藤 安いなあ。

戸高 全部の量のCD化が500万？

武田 ええ、1箱1万円でやるそうです。

戸高 紹介してもらいたいな（笑）。

武田 いくらでも紹介しますよ。そのかわり、向こうで原本が廃棄されてしまいます。

伊藤 それは……（笑）。

武田（知） それは、大変だ。

武田 だから、そういう資料であればいい。企業資料ってそうです。もし返却するんなら、その返却のコストをこちらがさらに払わなきゃいけないのと、問題なのは、デジタル化する時にホッチキスとか全部はずしますね。話を聞いたら、たとえばホッチキスを取るとか、綴じをはずすのにいちばん手間がかかっている、そこの人件費が最大のコスト要因だそうです。だから、それを復元しろというとなんかさらにコストがかかりますから、ちょっと大変かもしれないですね。

だから、利用できるかどうかわからないですが、先ほど言ったように「もう原本を残せなくてもしょうがないかな」というような部分について、そういったことを使って資料の

整理をして、デジタル化なり画像化してしまうような方法でも考えないと、この分量は大学としてはとても持ち切れないだろうと思っているので、そんなことも含めて今後の方針を検討しているということです。まあ、500万円は魅力的なんですけど、でもその500万円すら、ちょっと私のところではすぐ出ないので。

伊藤 東大経済学部は、だめですか。

武田 いやいや、だって経済学部で歴史というのはマイナーな分野で、経済学の研究のために『オンライン・ジャーナル』を買うことについてはみんなすぐ賛成してくれますけど、10万円の資料を買うのでも「こんな無駄遣いをしていいのか」と、図書委員会で言われる時代なんですよね。だから500万円はちょっと厳しいですが、でも何らかの方法を考えないと、せっかく預かった資料をみすみす捨てるというわけにいかないのです。

でも、ここに箱数が書いてあるけど、非常に膨大な資料でありまして、その意味で大変重要な資料も含まれているものだと思いますから、さすがにこれは食いついてくる若い人が何人もいて、これだけの量ですからドクター論文が何本できるかわかりませんが、相当数できるんじゃないか。ぜひ皆さんの周りにでも、多少でもこういう会社に関心のある方がいらしたら声をかけていただければ、労働と引き換えに資料をお見せするというのが原則なんです。

伊藤 いいですね。それ、すごくいい。

武田 働かない限りは、資料を見せない（笑）。自分に関係しない資料の整理でも喜んでやらない人には、見せないというふうに言っております。これ、山崎君の方針なんですけどね。

伊藤 いい方針ですよ。

武田 資料整理の勉強にもなるんじゃないかと思っておりますので、声をかけていただければ。

もうだいぶ時間がたちましたけれども、あと企業資料とか官庁資料について、知ってることを少し補足的に。企業資料全体に関しては、もう少し広い形で皆様のご覧になるチャンスはあると思います。とくに90年代に入って三菱の史料館ができて、三大財閥経営の史料館は一応整備されて、ある程度の公開が進められていますので、三井・住友・三菱の順にできていますけれども、それぞれで特徴はありますが、財閥系企業の資料、とくに本社関係の資料は幾つか重要なものが公開されて、皆さんでもご覧になれるようになっています。

「三井文庫」がいちばん進んでおりまして、近世期から近代、戦前期にかけての文庫本体の持っている資料はかなり公開が進みまして、非公開はもうあんまりなくなってきていると思います。ただ、三井文庫は同時に独自の事業として、関係企業の資料を集めています。ただ、これは完全な収集のものと寄託のものがあるって、寄託のもの等は原則として企業の許可が得られないと見られない状況になっていて、そういう形で「三井文庫」の所員しか見られない資料がかなりまだ残っているようです。

「住友史料館」は、これも中心は近世期をずっと長くやっていたんですが、最近になって近代に関する論文も出るようになってまいりました。近代の資料が使えるようになって

きております。私が最初に史料館に行ったのは1976～7年ぐらいのところですが、その頃はなかなかガードの堅いところで、最初、「住友家の許可がないと資料を見せられない」と言われたので、伝をたどって住友家のご当主の紹介状を持って行ったら、次には、私は金属鉱山史を調べたかったので、「住友金属鉱山の許可がないとだめだ」と言われた。しようがないのでまた東京に戻りまして調べたら、たまたま大石嘉一郎先生の二高時代の親友が社長だったんです。これはいいというので、その紹介状を持って行って両方揃えたわけです。そしたら、「いや、資料の整理が済んでないので、見せられない」と（笑）。何のことはない、要するに東京から京都まで3往復やりまして、まったく無駄になったことがあります。でも、最近はそのようではなくなりまして、近代の資料をずいぶん見せてくださるようですが、私はその苦い経験があるので二度と行きたくないです（笑）。最近、近づいてはいませんが、でも状況はよくなっていますので、住友関係もわかります。

「三菱史料館」は、湯島に三菱の120周年記念事業でつくられまして、資料を公開し始めていますが、ここも戦前だけです。ですから、対象としている時期は三菱がいちばん短いわけです。住友、三井も近世がありますので。三菱は、幕末から1945年までの資料を対象にしていますが、その中心になっているのは岩崎弥太郎時代、弥之助時代、久弥時代までですね。小弥太の時代、つまり三菱合資会社が持ち株会社化していったコンツェルンとして展開してくる戦間期については、全体的には史料館の資料は薄いんです。三菱自身は歴史に非常に興味をもって、大正期と昭和の初期に歴史編纂事業とか資料課をつくったりして事業をやっているんですが、その時点で集まった資料はきちっとあって、従って三菱が合資会社という1つの会社で船もつくっているし、炭鉱もやっているし、商事会社もやっている時代の資料は比較的よく残っていて、これは通信書翰まで全部残っているんですが、残り方がすごいものですから誰も手をつけないという状態になっていますけれども、そういうものがあります。これも、ぼちぼちと出ています。

伊藤 「三菱史料館」は、武田先生とご関係があるんですか。

武田 たまたま史料館が研究部のようなものをつくって、助手のクラスで研究員を一人、常勤ですけど3年任期で置きました。それ以外に、非常勤の研究員ということで大学の経済史ないし経営史の研究者を入れるということになりまして、一橋の鈴木良隆さんと、私と、岡崎哲二さんとで、いま非常勤の研究員をやっております。「住友史料館」は専属かもしれないませんが、この非常勤研究員は「三井文庫」も置いていまして、原朗さんも、石井寛治さんも、何人かの方がやったことがあると思いますが、そういう制度を使って外の大学の研究者が一時的に、所員と同じ資格で中の資料が全部見られるというような公開の制度をとっています。だから、これをうまく回せば、みんなが見られるようになるということです。

企業資料館として大きなものはそういうものですが、それ以外にかなりたくさん企業の資料館がありますけれども、一時、産業考古学が流行ったせいで、企業メセナでものを見せるというのが流行って、企業資料館といっても、どっちかというと製品と機械を中心としたものがかなり多いと私は思っています。きょう持って来ようと思って忘れたんですが、企業資料館の案内に関する本が出ています。『企業博物館事典』（日外アソシエーツ）とい

う書物で、どういう会社が、どういう企業資料館を、どこで持っているか。たとえば、「カゴメという会社は発祥の地にこういう記念館を持っています」とか、そういうのが全部出ているものがありまして、そういうものをお読みになればご覧になることができますけれども、文書そのものに関して言うと、残ってないところのほうがはるかに多いと思います。

その中で、比較的面白い資料が残っていたという印象があるのは、そこに幾つか例示しましたが、明治時代の政商の一人だと言われている「藤田伝三郎及び藤田組」の関係資料は、藤田組、藤田興業の後継会社である同和鉱業が本社の総務部の文書のところで、マイクロフィルムで所蔵しています。なぜ会社がマイクロフィルムで持っているかというのは、非常にめずらしい例なんですけど伺った範囲で言うと、筑波大にいらした大江志乃夫さん達が、楫西光速先生の関係かもしれません、政商をやっておられましたから一度調査に入って、出てきた資料をマイクロ化して提供したようです。

藤田組という企業は、昭和2年の金融恐慌で事実上破産企業になって、日銀管理になっていると思うんです。その時点で鉱山会社と財閥本体の本社が分かれてしましまして、本体は大阪に小さなビルを持っている管理会社になってしまうんですけども、そちらのほうに藤田系の資料が残っていたらしいんです。それを昭和20年代に同和鉱業が鉱業会社の社史をつくるために、かなり悉皆調査をしていて、指導にあたったのは田中惣五郎のようです。彼が歴史家としていろいろなアドバイスをして、調査をしまして、大阪等に出張して、あるいは小坂というような事業所代も全部出張して、かなり広汎な調査をします。そのまとまった史料がありまして、目録もこんな分厚いものが残っています。残念ながら、その目録に対応した資料は百パーセントは残ってないで、1割程度しか残ってないんですけども、しかも資料は……。

伊藤 それは、先生はお持ちですか。

武田 あります。私のところにもありますし、一般的に同和鉱業に行ってもみられます。資料は、残念ながら一次資料ではないんです。つまり、鉱業会社が社史をつくるために、たとえば大阪の藤田興業とか藤田家に行ってみせてもらって、全部手書きで筆写したものが残っている資料です。ただ、これはかなり丁寧に、一時的に整理をされたものですから重要な資料として、財閥史の中では有力なものです。最近では佐藤英達さんという方が藤田組に関して幾つもの細かい小さな論文を書いていますけれども、それも全部データソースはこの書類だろうと思います。他に見つかっていません。

それから、私は今まで、会社史等でやるのがいちばん企業資料との出会いは多いんですけども、全体がわかったいちばん大きい資料は、「小野田セメント関係資料」でした。小野田セメントという会社は、ご承知のように土族授産の事業としてスタートした山口県小野田の地場の企業でありまして、それが後に三井物産と提携していくわけですが、本社は昭和28年（1953年）まで小野田市にあったんですね。小野田市は、小野田セメントぐらいしか会社はありませんで、その両側には宇部とか光とか、いろいろ危ない会社がいっぱいあって震災には遭っているんですが、小野田市は震災を免れている。そのために、創業期以来の企業資料がほぼ全面的な形で残っています。

土地の値段が安いせいもあるんでしょうけれども、これは完全に綺麗に整理・製本され

た形で、体育館ぐらいの広さのところには棚がずっと並んで、全部並んでいます。今はどうなっているか、この会社は2度にわたって合併されて、どんどんリストラされているものですからわからないんですが、あそこの資料を捨てることはないんじゃないかなと思っていますが、『小野田セメント百年史』をつくるために専門の経済史、経営史の研究者が5人入ったんですが、見て、「これは全部読めない、諦めよう」と思った。というのは、社史のために使うだけの分量を超えているようです。

どういふものがあるかという、企業で本社があって、いろいろなセメントの工場を持っていますね。朝鮮にもありましたし、中国にもありました。そういう事業所からの報告があるんですが、これが半期ごとにまとまって、しかもその半期ごとの報告は工場単位の報告もあるんですが、工場の工務を担当している係の報告書もありますし、労務を担当している係の報告書もあるし、経理を担当している報告書もある。そういうものが半年ごとにありますから、1年間で1つの工場で10冊ぐらい。そういったものがずらっと並んでいくんです。そういう系列のもの、セメント業というのは企業の合併・集中が非常に盛んだったので、合併した相手の企業の資料も残っています。合併の経緯のものもあります。それから、大正の半ばからセメント連合会というのができて、カルテル活動を盛んにやりました、これは価格の協定だけではなくて生産の調整、設備投資調整まで全部やります。重要産業統制法が発動される例外的な例の一つになる大変面白い産業なんです、そのカルテル活動の記録も全部残っています。

そういう形で、非常に見事な企業資料の体系であったように思いますが、その後、保存活動をしてないので残っているかどうかわかりません。一般的には利用はできないんじゃないかと思うんですけれども、ただしこの会社を1つの例にしますと、先ほど言いましたように朝鮮半島と中国大陸に工場を持っています、この工場の活動がアメリカのカリフォルニア州の現在起こっている訴訟との関係で、もし残っていても、今すぐには多分見られない状態になっています。どういうことかという、当時その工場に働いていて、後に渡米してアメリカ国籍を取った方たちが数人おられるわけで、そういう人たちはいわば民事の訴訟で損害賠償を請求できるようなんですが、そういう訴訟活動が現に起こってしまっていて、そのために企業資料に対して非常に防衛的になっている。これは、この会社だけに限らず、日本の企業全体が今そういう状態ですね。戦時期に外地とか、あるいは国内で、強制連行であるかどうかの評価は別にして外国人を雇用していた経験のある企業では、そういった問題が起こっています。そのことがあるので、ちょっと利用できるかどうかわかりません。

それから、私が見た資料で面白いと思っている次は、「古河市兵衛関係資料」です。古河関係は、古河鋳業と、古河電工と、日本ゼオンだったかな、幾つかの会社の社史をやりました、その時に資料を見たのですけれども、古河には「古河市兵衛関係文書」というのがひとまとまりで、きちっとしたものがあります。主なものは、市兵衛の時代のいろいろな記録を再構成して資料集として、文書として編纂した「初代翁文書」というのと、もうひとつが市兵衛自身が足尾とか、阿仁とか、藤沢とか、事業所間とのやりとりをした手紙ですね。市兵衛が出した手紙。市兵衛に戻って来た手紙はそんなに多くなくて、足尾の鋳長・

木村長七からの手紙しか残ってないんですが、そういう書翰集が年間で何十通という、かなりの量で残っております。

市兵衛というのは希代の悪筆でありまして、私にはとても読めないんですが、資料集を編纂した人たちがきちっと読み下して、楷書で書いた写しをつくってくれているので内容を知ることにはできるんです。けれども、どうもその人たちでも読めなかったところがあって、原本通りグシャグシャと書いたままになっているところがあります。

何故こういうものができたかという、ご存じの方がいるかもしれませんが、古河家は市兵衛伝、二代目の潤吉伝を中心に、それから木村長七とか長兵衛という初期の経営者の伝記を昭和の初めぐらいにほとんどまとめているんです。どうもその時にまとめられた文書らしいんですが、古河は当時、窓際がたくさんいたんですよ。1920年の恐慌の時に、商事会社が破綻して事業を大幅に縮小せざるを得なくなって、会社をどんどん潰していきますものですから、かなり能力のある人たちの仕事がなくなっちゃっていて、その人たちにこういう仕事をさせていたようです。その結果、残っている資料ですが、古河市兵衛が東京の本店から足尾にどういう指示を出していたかとか、あるいは足尾からどんな返事が来ていたかというのがわかります。

手紙のやりとりで、当時、足尾とのやりとりが1週間から10日ぐらいかかっているものですから、だいたい追いかけて話が進んでいて、このあいだ出した手紙で言ったことの返事がこないうちにもう次のことをやっていたりするんで、手紙の形式は非常に面白いんですが、「何日付けの手紙でこうこう、こういうことを言ってきたけれど、これについては……」と必ず書いてあるんです。だから、片側の手紙だけでやりとりの内容が全部わかるようになっておりまして、その意味でも貴重な資料で、例えば足尾期の初期に技術導入で非常に面白い、いろいろなことを積極的にやるんですけど、そのやりとりとかがわかります。この資料が出てこない基本的な理由は鉱毒事件に絡んで現場とのやりとりがあるんですけれども…。

市兵衛は基本的に、鉱毒は足尾が原因ではないと考えていたようですけれども、「鉱毒事件に関することは全部、足尾では対応するな」という指示を出していたということがそうした手紙からわかる。古河機械金属——古河鉱業の後継会社です——が持っているはずで、私の知っている限りではもう十数年前ですか、第一勧銀の本店の金庫の中にしまっていると言われていたので、そのままだと思うんですけどね。捨てられてはいないと思うんですが、なかなか日の目を見ない。時々、読んだ時に書いたメモを使いながら、「こんなものがあるんだぞ」といって遊んでいるんですけど、本体が出てこないと使いにくくて困っています。これは残念ながら非公開ですが、資料があります。おそらく、そういう類のものは今まだ探せば、たまたま私がこれに出合っただけで、あると思います。

それから、4番目に書いてあるのは「花王石鹼関係資料」で、現社名は花王です。花王石鹼といって、これも明治から繋いだ会社で、企業としてはマーケティング関係では面白い。ご承知と思いますが花王の社史『花王石鹼五十年史』は、服部之総さんが中心になってつくったと言われます。事実上、歴史家としての活動ができなくなった時に花王の総務に拾われて、宣伝部にいて社史を書いていたというんですけれども、本人が書いたのかど

うかちょっと疑問のところはありますが、そういうユニークな経歴のある会社です。

ここは、たとえば二代目の社長が時代の風潮に相当敏感な人だったようで、ぱっと見ると労働運動のポスターなのか、花王の宣伝なのかわからないような石鹼のポスターを昭和初期につくっているんですが、そういう類のマーケティング関係資料から全部残してしまして、しかもこれは完全に公開しています。東京工場が亀戸にあります、その中に資料室があって公開しているものです。こういうところが増えてくるといいと思うんですが、企業資料の一つの典型的な形式を示しているところです。こういう例が幾つかあると思いますが、社史とかに関わった時に、「これからできるだけ資料だけは残してください。そして、余裕があったらいずれ公開してください」とお願いしてくるんですが、なかなか実現はしておりません。花王などは、そういう意味ではうまくいった例だと思います。

役所の関係は、最初のところでお話ししたように、私は大蔵省との関係はほとんどありません、もっぱら通産行政との関係なんですけれども、通商産業調査会という通産省の外郭団体の下に産業政策史研究所がつけられたのが1974年で、そこで通産省の戦後の政策史に関するヒヤリング活動をかなり活発にやりました。およそ20年にわたって、主要な役職、ポストを歴任した役人たちの話をインタビュー記録として残してあります。ただ、現状はまだ非公開ですが、戦後の政策史にとっては貴重な資料ですし、一部戦前にまでわたっています。

そういうところに多少関係していたのと、1985年だったかに「通商産業政策史」というプロジェクトが立ち上がりまして、当時、安藤良雄さんがボスだったんですが、立ち上がる直後に亡くなってしまいましたので、そのあと隅谷三喜男さんが中心になって編纂委員会をつくられて、10年近くかかって戦後の「通商産業政策史」が出ました。その過程で通産関係の資料を見ておりましたが、結論から言うと、こんなに資料に関してひどい官庁は他にないんじゃないかと思いたくなるぐらい、ひどい。でも、他を見てないのでわかりませんが、少なくとも大蔵省に比べれば、はるかに大蔵省のほうがましです。大蔵省もひどいなと思うんですけれども、でもずっとましです。

政策関係文書は、「吉野信次文書を中心とした商工政策史編纂資料」というのが中心でありまして、これは昭和20年代に土屋先生が「商工行政史」「商工政策史」というのを中心になった編纂した時に集めた資料で、これが残っています。これが、使えるものとして一番いいものだと思います。産業合理化とか、産業統制の議論とか、あるいは自動車政策に関する議論というのは、基本的にはこの「商工政策史編纂資料」で行われております。変な話なんですけれども、かつては比較的緩やかに見せていたんです。この商工政策史編纂というのは役所の編纂業務としてはほんでもない仕事で、編纂計画の立案から刊行終了まで約30年かかったという。だから、最後の本が出た頃には最初の本はもう古くなって使い物にならないというか、対象になっている時期が違い過ぎるという、そういうアンバランスな本になっちゃっているんですけれども、その編纂業務をしている間はこの資料を、比較的研究者には紹介があれば見せていたんです。したがって、私より上の世代の人は見ているんですけど、そういう人たちが見た資料で論文を書いているんですが、その資料を批判しようとして若い人が「資料を見せてください」と言うと、今は見せてもらえないん

ですよ。そういうギャップが発生していますが、とにかくそういうものです。

これには、「吉野信次文書」だけではなくて、美濃部洋次さんの文書が一部入っていたり、あと小金義照さんの文書とかがありますので、基本的には役所が残した資料ではなくて、役人が個人文書として保存していたものを、戦後集めて再編成したものです。

伊藤 元の形は、残っているんですか。

武田 商工省、軍需省がもともとつくっていた資料としては、資料は何もないと思います。

伊藤 個人文書になっている分は？

武田 個人文書としては、原型で残っています。

伊藤 それを、「小金義照文書」というふうな感じで見ることができるんですか。

武田 資料を収集した時に、いただいた方別に整理しているんです。だから、「吉野信次文書」、「小金義照文書」、「美濃部洋次文書」その他と、整理もそういうふうになっています。

戦後については、本当に断片的な資料しか残っていませんで、法案をつくる時、最後に法令審査にかけますね。そのところの資料だけは一応系統的に残っているんですが、それ以外はあんまり多くのものは残っていません。商工政策史ではなくて、「通商産業政策史」の編纂事業を始める時に、資料編纂について問題を我々の側から提起して、直近で残っている資料から、「これから以降については、きちっと資料を残そう」ということで、役所のほうで考えてある仕組みをつくって残し始めましたので、80年代の終わりぐらいまでは比較的残っています。ただし、その後またこの仕組みが機能しなくなっているのが、現在はかなり厳しい状態だと思います。

90年代に入って、通産政策史の後をどうするかということで、通産政策史研究委員会というのがつくられて幾つかの研究活動をしたんですけど、その時に判明したことで、90年代の資料については再度、組織的に残っていないということです。何故そうなったかということ、実は70年代の半ば以降につくった仕組みが永続性がなかったんです。どういう仕組みをつくったかということ、当時、ある基準を定めて「こういう資料を残せ」と言ったところで絶対残らないと考えられたので、彼らはどういうことをしたかということ、役所の発生する文書の中でも最終的に重要な文書は、当時はタイプ印書かガリ版刷りで外注していたんですね。まだ70年代ですから。したがって、「重要な文書は必ず会計の発注業務と支払い業務を伴うので、そういう業務が必要な文書については、必ず1部を会計に提出すると同時に、資料室に収めなさい」というルールをつくったんですね。そのために、役所で発生する非常に重要な文書がこの時期に残り始めるんですが、90年代に入ってワープロでやるようになると、外注しなくなっちゃったんです。ごく例外的にしか外注しないものですから、「外注するものだけ残せばいい」というルールのために、何も残らなくなった。その後を考えないというのは、ちょっとひどいと思うんですが、そういうことでありまして状態は本当によくありません。

あと、もうこれ以上お話しすることはありませんが、我々が資料ということ、皆さんお考えになるのはどういうのが資料かわかりませんが、とにかく何でも資料みたいなところがありまして、私は産業史をやっている場合に自分の本でいちばん使ったのは、戦前期に工

学部で卒業報告と実習報告というのをやっています。たとえば、工学部の鉱山学科にいる学生というのは、夏休み中2ヵ月ぐらい現場に入り込んで、業務の見習いみたいな格好で見学して調査してくる。その調査報告をまとめることが卒業報告の前提として必要で、初期にはそれだけでよかったんですが、私の見た範囲で言うと、大正の後半ぐらいからはそれを元にして、どこか「こういうことを改善すべきだ」というような技術的な提案を含む論文を書かなければいけなくなったんですが、この「工学部実習報告書」というのが当時の状況をいちばんよく伝えているわけですね。

教える側の技術者も、いずれ自分たちの仲間になる技術屋の卵だと思っているから、情報を隠す必要がないんですよ。したがって極端に言うと、企業って本来、技術用語とかコスト情報というのは重要な機密事項なんですけど、「いま幾らでつくられている」とか、「この技術はここが問題だ」とか、「これがいいところで他にはないぞ」とか、そういう話が全部出ています。そういうものを探してきて、技術史的な知見に加えるというようなことをしています。

それ以外には、一次資料としては皆さんもお使いになっていると思いますが、県庁文書とかいうものがありまして、秋田県の県庁文書なんかは大変役に立ちますし、愛媛県はそんなにたくさんありませんでしたが、そういうものがあります。それ以外に経済史の領域全体を通して見ると、これは私が説明できるようなものではありませんけれども、地主に関する文書というのは大変多くの蓄積があるわけで、そういう意味ではきょうお話しできなかった文書の資料ということで言えば、地方に所在している公共団体の資料室が保存している、あるいは史料館が保存している資料、それから地主の文書というものが、利用できる形態としては、こちらのほうがはるかに発掘と保存が進んでいるものとしてはございますので、そういったものも視野に入れていただければと思います。

こんなところで、洗いざらいですかね。

伊藤 ありがとうございます。ちょっと質問させていただいてよろしゅうございますか。今の経済産業省の「吉野信次文書」なんていうのは、今度の情報公開でどうなっているのかということをご存じでしょうか。

武田 いや、知りません。ただ、文書を保存していることはわかっているものですし、所蔵を表明しているはずですから、公開を求めれば、非公開の理由にあたらぬものであれば見られるはずだと思いますが。

伊藤 やっぱり公開法に従ってやらなければ、だめということでしょうか。

武田 いや……少しそれでやっていただいて、すごく面倒だということに向こうに嫌というほどわからせたら、もっと他の方法が出るんじゃないかと思っているんですが。

伊藤 今、大蔵省の財政史用の文章にアプローチをかけているんですけども、どちらとも言わないというか、まず接触しない。会いたいと言っても会わないという状況になっておまして。

武田 そうでしょうね。

伊藤 それは、どういう意味なのかなと思って。通産の場合は、どうなのかなということがあったんですが。

武田 財務省は、今はちょっとひっくり返っていますので、言っても相当難しいでしょう。というのは、歴史文書としてかなり古いもの以上のものが、今ホットイシューになっている。つまり、お読みになった方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、『アエラ』の最初の記事とか、NHKの報道は、財務省が1970年代とか80年代の、つまり我々から見ればまだ歴史にも十分になっていないような新しい資料を、公開したくないがためにどんどん廃棄していると。そういう告発が主だったんですね。

しかも、それを内部の事情を知っておられる先生が証言した形で記事が出ましたので、財務省としてそれに対してどう対応するのかということで問題が発生して、閉鎖機関整理委員会の資料は、当時の認識では大蔵省は捨てたんですけど、今は「いや、あの資料は重要だと思ったので捨てませんでした。東大に預けてあります」と答えておられます。だから、捨てなかったことがよかったというか、「我々もちゃんと資料の重要性を認識しております」という例に使われて、すごくいい迷惑なんですけれども(笑)、でもそういう話になっています。ですから、省全体として資料保存について、内外からの批判に対して対応のスタンスが定まらないような感じになっている。ですから、ちょっとわからないですけども、今すぐ言っても出てこないというか、何も言ってもこない可能性が大きいんじゃないでしょうか。

こちら側の動きでは、数日のうちには明らかになると思いますが、金融学会と、証券学会と、社会経済史学会、経営史学会、土地制度史学会という五学会が共同で、「証券金融行政に関する資料の保存についての要望書」を、財務省と金融機関に出す準備をしているようで、とにかく「捨てないでください」というお願いをしようとしているところです。

伊藤 それは、大事なことですね。

所澤 群馬大学の所澤と申します。閉鎖機関整理委員会の資料のことについて、『アエラ』で報道されたのを読んで、そしてNHKテレビで報道されたのを見ただけなんですけど、『アエラ』で報道された時には、「これは廃棄される文書だけど、しかし廃棄されるということではなくなるのはどうもまずいと判断した人がいて、官僚の知恵で研究用に貸与すると。研究というのは永久に終わらないから、研究用に貸与すればなくなるという判断をした」というような書き方をしてあったと思うんですね。

NHKのほうでは、その文書が廃棄されたというので、「これは大変な問題で、こういうことをしているのか」と批判するような形で、同じ官僚の対応がまったく違う形で解釈されているんですが、現実的にはどういうことだったと先生はお考えですか。

武田 どういうことというか当事者ですから、当事者の一方的な証言だと聞いていただいたほうがいいんですが、『アエラ』の記事は私が筆を入れました。NHKは、「官僚はけしからんから、やっつけるという取材をさせてくれ」と言って来たので、「そんなことをされたんじゃ、せつかく好意的に協力してくれて、資料の保存に努力してくれた役所の内部の人たちに迷惑がかかるから、断る」と言ったんです。だから、NHKは我々から証言を得ていません。一方的に「役人はけしからんという報道をさせろ」と言ってきたんです。報道との関係は、そういうことです。

実際の事実は、こういうことです。廃棄は既に役所の中で、その当時はある局のレベル

で決まっています、先ほど言いましたように廃棄のための予算もついていました。あの予算が一体どこへ行ったのか、ちょっと疑問なんです（笑）。つまり、トラック代と廃棄業者に支払うお金は、ちゃんと予算を取ってプールしてあったわけです（これは、オフレコです）。要するに、予算を取ってあるので、それはやらざるを得ないんだという話だったんですね。そこは崩せないというのが、我々の判断です。そのために、「廃棄をするのは構わないので、東京大学に捨ててくれないか」というお願いをしたんです。そうしたら、それはだめだと。廃棄業者も決まっていると。東大に捨てていただければ、我々は輸送費を払わずに手に入れられると思ったんですけれども（笑）、それはだめだと言われた。谷津の倉庫に引き取りに行けという話で、その時に最終的にこちらが案を出しまして、「東京大学が責任をもって資料の廃棄を行う」という文書が残っています。

「ただし、研究活動に必要な資料が含まれていると思うので、その研究用に使う期間の間、我々のほうでそれを利用していてもいい。しかし、それが終了した時点でただちに廃棄すること」という約束になっています。これは、大蔵省の側から見れば、廃棄したということを読み込める文章で、我々としては、我々が研究を終わらせない限りは資料を保存できるというふうに読めるという意味で、玉虫色の文章にしてある。そういう文書が取り交わされています。ただし、直接会っていませんが、口頭で伝えられるところでは、財務省は現在は「廃棄していない」と現状通り言っています、「あれは、東大に預けてある。所有権は我々が持っている」と、最近の新聞等報道機関の取材に対しては回答していますので、確認に行くと藪蛇なので、今は知らん顔をして（笑）、僕らは貰ったものだと思っていますけど、どっちでもいいんです。大蔵省が所有権を主張するのなら、保存する場所を提供してくれるはずだと思っていますので、そう言ったら「じゃ、お返ししますので、保存してください」とお願いするつもりです。

伊藤 先ほど、労働運動資料の話が出ましたが、編纂されて刊行されたもの以外のデータは、経済学部と社研に残存しているわけですか。

武田 わかりません。散逸していると思います。その編纂委員会は、多分最初は大河内先生の部屋だったんだろうと思いますが、そのあと隅谷先生かどなたかの部屋であって、そのお二人がいなくなった時点では、編纂の事務局は経済学部にはないんです。東京大学出版会が、どうやらその事務局をお引き受けになったようです。ですから、編纂のためにつくられた大量のカード類も、当然その時点で当然出版会のほうに移されていて、東大出版会のほうでさっき言ったカードは、どうもある時期に捨てたみたいです。

伊藤 捨てられちゃったんですか。

武田 ええ、捨てられていました。捨てられて、雨に打たれてどうにもならない。字が流れてしまって使い物にならない状態になっていたので、私どもも流石にそれは諦めました。これはしょうがない、ゴミだなと。原資料ではなくてカードだけでしたが。

伊藤 僕が社研の助手をやっている頃に、林茂さんの頃に労働関係の方が出入りしてまして、三輪寿壯と、もう一人は誰だったかな、その文書は確かにあったはずだと思うんですが。

有馬 菊川忠雄。

伊藤 一度、三輪さんの遺族が軽井沢の図書館に文書を全部寄贈したのか、寄託したのかなんですね。受け入れた軽井沢の図書館は、なんとも手のつけようがないので、そのまま箱に入れたまま置いてあったわけです。僕らが行って、それを仮に整理をしましたら、林茂先生とのお弟子さんたちの名前で借用書が入ってまして、その借用書に書いてあるのは実はその中にないということで、返却されてないと。それで、林先生の蔵書とかを全部調べたんですが行方不明なので、倉庫も行ったんですけど、あるいは……。

武田 捨てられていたのは、資料ではありませんでした。

伊藤 わかりますけど。

武田 だから、その資料はどこかに残っているかもしれませんが、一応私自身は、東大経済学部の建物の中の資料の残り方は全部わかっているつもりなんですけど、その中にはないですね。

伊藤 社研の可能性はあるな。

武田 社研の可能性は、もちろんあります。それから、東大出版会が預かっている可能性はあるんですが、ただそれは聞いたんですが、どうもはっきりしません。もうその当時の方自身がいらっしゃらないんだと思います。要するに、あの事業を立ち上げた時期の石井さんとかの世代の人は。

伊藤 石井さんだったら、いろいろわかるよね。よし、石井さんに聞いてみよう。

武田 さっきの『アエラ』のは、それでいいんですか。

所澤 もうひとつお聞きしようと思ったのは、財務省が廃棄するということは、要するに溶かしたり燃やしたりするところまで含めて、廃棄と考えていたんですか。

武田 焼却処分の予定だったようです。

所澤 昔ですと、廃棄しても結構、古書店に流れたりとか……。

武田 それではないです。

伊藤 今、「廃棄」という場合には、溶かすなり、燃やすなり。

武田 が、多いようですね。

所澤 法令でそういうふうに書かれているようなんですが。

武田 その法律の前に、駆け込んじゃおうという話ですから。

所澤 ですから、法律が出る前に処理をしたほうがいいと判断をしてやったのかなと、想像していたんですが。

武田 いえ、古書店が絡んでいたとしたら、あんなにスムーズにこちらに資料はこないと思います。逆に、古書店が非常に固執したでしょうから。

伊藤 ここに、神野（直彦）さんというんですか、この方の解説のところに書いてありましたけど、「大蔵省保存文書室に『昭和財政史資料』として所蔵されている」という、大蔵省保存文書室というのはご存じでしょうか。

武田 これは通称、財政史室と言っているところだと思いますけど、神野さんは財政史に関わっているから、正式の名称がそうなっているのかもしれませんが。

伊藤 そうですか。経済学部でお持ちの営業報告書は、私は地方史誌をつくる時にだいぶ活用させていただきました。

武田 営業報告書だけで論文が書けるという時代では、もうないんですけどもね。

伊藤 いや、資料としてはいいですよ。

武田 そこから始めていただかないとだめなところは、ずいぶんあります。

伊藤 何も資料がないんですから。

武田 ただ、営業報告書がある会社というのは、ある意味ではそれなりの規模と企業活動を展開しているのです。

伊藤 いや、今ないという会社。

武田 鈴木淳さんが関心をもつような会社は、だいたい営業報告書がないでしょ？（笑）

伊藤 何とか鉄工所ですか。

武田 そういうことが多いですよ。

伊藤 石川さんの化学工業統制会は、重産協にも関わっているんですか。重産協関係にございましたか。

武田 重産協、一部あります。ただ、それは重産協に関わったと言ってもいいし、石川氏が統制会会長として関与したんだと思います。

伊藤 そうでしょうね。

季武 ちょっとくだらないことですが、創価大学の季武と申します。緊急の仕事で、正金銀行総裁の三島弥太郎の史料集を出して、その解題を書かなくちゃいけないんですけども、いまざっと目録を見せてもらいまして、かなり対支借款みたいな資料もずいぶんあるようなんですけども、ただ解題の中でそういうのがあると書いてもよろしいんですか。

武田 所蔵していることは公開できます。構いません。ただ、「まだ整理されてないので、簡単にご覧いただけるわけにいかない」ということだけですから、それは事情さえわかっただけであれば。

季武 その旨を書いて？

武田 これは完全に我々のほうで持っていますが、閉鎖機関の資料のような曖昧な形では持っていませんので、構いませんし。

伊藤 経済学部図書館の文書室（ブンショシツ）というのは、専任の方がいらっしゃるんですか。

武田 先生もブンショシツと言うんですか（笑）。モンジョシツです。

伊藤 僕はだいたいモンジョと言うんですけども、経済学部だからブンショでいいのかと思ったんですが。

武田 専任ポストはありませんで、いま非常勤で一人、先ほど言った富善さんという方が。ものすごい薄給なので、ちょっと申しわけなくて困っているんですが。それまではたいいてい科研費とか、そういう研究費が取れた時だけある期間雇っているという格好になっていたんですが、何年か前に文部省の制度か人事院制度かわからないけど、専門研究員的な制度で、「35歳以上で、特定の業務に対して非常に専門的な知識を持っている人を非常勤で雇える」という制度ができて、学部にも1つずつ枠を貰ったんです。それでどうしようかということで学部内で相談したら、専門職だということで最初に学部長が計算機関係の部屋に置こうと思ったら、「そんな年いったやつは要らない」と計算機室に言われたんです。「3

5歳を過ぎているんじゃない」と。そうなんですかね。それなら図書館でという話になって、ここで1つポストをいただいて、週4日来ていただいて、資料の整理と、皆さんから来る閲覧の希望等に対応するようにはしています。

将来的には、いま国際共同研究センターは、大きく言うと共同研究と資料部門と2つの部門があって、その部門の下に資料室、文書室がついているものですから、そこに専任の助手ないし講師レベルの人を置ければいいんじゃないかとは思っている。ですが、先ほど来申し上げているように、とにかく私のところは「歴史はもう要らない」という風潮で、はっきり言う人がいるんですよ、「アメリカやヨーロッパの経済学部、経済史なんてない。歴史をやっているのは歴史学部であって経済学部じゃないから、もう要らない」というか、「できれば出て行け」と。

伊藤 鈴木さんのほうで引き受けたらどうですか（笑）。

鈴木 もっと財政状況が悪くなる（笑）。

武田 「それがだめでも、おまえがいなくなったら次のやつは採らないぞ」という雰囲気があって、ちょっと情けない話なんですけど現状を維持するのが精一杯です。時代が変わればいいんですけど、どうなるかわからない。とにかくそんなことなので。

伊藤 じゃ、センターのほうもいないわけですか。

武田 センター自身には、資料部門には専任者はおりません。

伊藤 センターのものの整理は？

武田 先ほど申しました図書館の中にある資料室というか、対外的にはセンターの下にある資料室ですが、そこで職員が監督して、教官がやっております（笑）。

資料を貰ってくる時の原則というか、図書館と僕らのこれまでの暗黙の了解は、「日常的な業務に支障をきたさないこと」だから、今度400箱貰ってくるというと、貰ってくる時の手伝いぐらいはしてくれるんですが、最近はそれもやってくれなくなって、たいていは私がレンタカーのトラックを運転して、院生を連れて行って運び込んで運び出すという仕事です。

伊藤 僕のとこなんかは、まだましだな（笑）。

武田 通常の日常的な図書の整理業務とか閲覧業務に支障をきたすようなプラスαの仕事はやらないということなので、最後の登録のところだけは僕らではできませんで、IDカードを貼ったり、登記簿に備品として載せるところは図書館にやっていただくんですが、その前までは全部貰ってきた人の責任で、お金も人も雇ってやるということで、ここまで来ています。

ちょっと今は、その先は考えたくないですが、でもそれができないと、やっぱり大学という組織はこういう資料の収集はできないという感じで、もう諦めているんですが、でも僕、変な論文を書くより資料を残すほうがずっと世の中のためになるだろうと思うんです。少なくとも僕の仕事としては。

伊藤 何という対応をしていいか、ちょっとわからない発言ですが、そういう心境になるものですか。

所澤 もう1つ、他のことをお聞きしたいんですが、企業の中で必ず保存してなくちゃい

けない資料というんですか、長期にわたって100年とか200年とか所蔵しなくては
けないと規定されているような資料というのはあるのでしょうか。というのは、スコット
ランドでビジネスアーカイヴズを見たことがあるんですが、グラスゴー大学のビジネスア
ーカイヴズでは書棚を1メートルいくらで一般に貸して、企業の200年保存の文書とか
いっぱい預かって、お金を取って運営しているんですよね。そういうのを見て、日本では
そういう形で企業の資料で保存しなくちゃいけないと決まっているものは、どの程度ある
のかなということがちょっと気になっていたんですけど、あんまりそういう話は聞いたこ
とがないので。

武田 イギリスの例は、必ずしも法定の文書だけではないと思います。要するに、企業資
料として保存するようなルールができて——フランスは完全にルール化されています——
いるので、自前でできないところは大学に寄託するような仕組みが機能していると思いま
す。

日本の場合には、法定の永久保存資料というのは商業登記関係の資料と、土地登記関係
の資料、それから取締役会と総会の議事録ぐらいしかありません。あとは、証券取引法と商
法と税法、それぞれ法定で年限が定められているものはありますけど、それ以上はありま
せん。会社でいちばん残っているのは、土地の登記簿、これはたいてい一番古いところか
ら残っていますね。ほとんど会社の歴史を書くには役に立たない資料です（笑）。役員会議
事録は残っていますけれども、それも欠落しているものがかなりあります。戦前は、完全
な義務はありませんでした。

ただそれ以前に、仮に残っていたとしても役員会議事録はほとんどが内容的に意味がな
いですね。とくに戦後の日本の企業では。「〇〇に関する件」としか書いてないんですよ。
それは何なのかというのは、ある程度読み解くことはできますが、「〇〇に関する件 承認」
と書いてあるのが議事録の基本的なパターンですので、どういう議論があって、何を決め
たかということについては、「役員会資料」というファイルとか、それ以前の企画関係の部
会とかいったもので、事前の案の稟議書のレベルのものが残ってないとだめなんです
が、それは義務がありません。

各社が自由に文書の保存規定を定めることは、そういうレベルではできるようになっ
ていて、比較的自前で倉庫を持っているところは、残しているところはかなりあるんです
が、最近とくにリストラをやらなきゃいけないということで、スペースの問題とか……。こ
れは、石油危機の後に1回起こっているんですよね。かなり大規模に文書を捨てる運動とい
うのが起こっていて、ここで1回、企業資料は壊滅的な打撃を受けているんです。それか
ら90年代に入ってもう1回で、90年代はさらにひどいのは、企業合併に伴う格好で資
料が捨てられることがあって、かなり捨てられています。

それから、70年の第一波の後かなりはっきりしてきたのは、営業倉庫を借りて保存す
るという仕組みができました。営業倉庫で保存する仕組みというのは、企業が自分でつく
っている文書の保存年限に従って、箱単位で文書を営業倉庫に預けます。そうすると、営
業倉庫はその年限が来るまで保管して、必要ならば出し入れに応ずるんだけど、たとえ
ば「2001年10月1日まで保存」と書いてあるものは、その日が来ると翌日には自動的

に廃棄する仕組みになっています。したがって、その中に企業資料として、歴史資料として残したほうがいいというものがあったとしても、誰も確認されないままにその時点で自動的になくなっていくというのが多くなっていて、企業資料自体の保存に非常に困っています。それは、紙になったやつです。

それから、同じように困っているのはデジタル化されたものの資料で、会計資料とかが電算化を認められて、かなりの資料がコンピュータのテープ上に残っているんですが、これはプログラムで自動的に消していきますので、かなり早い時期から古い数字がどんどん抜けていきます。ごく最近のことではありませんで、80年代初頭に、日本ゼオンという会社の70年代10年分の社史を社内資料でまとめてほしいという依頼を受けてやったんですが、「データに関してどうなっているか」と聞いたら、「全部コンピュータに入っているから大丈夫です」と言って、打ち出してもらったら最初の年の数字がないんですね。「どうなっているんだ」と言ったら、この系列の資料は全部10年保存で、10年たつと自動的に消えると。「それで、70年がなくて70年代を書けというのか」「でも、復元できません」と。元の数字を紙から再現することもできないという話でして、結局つながらない数字を1年分だけ最初につけてつくったことがあります、そういうことが繰り返されていますので、デジタル情報も問題がものすごく大きい。

もう、それは20年前からそうですから、近代史というよりは、現代史の抱える問題というのははるかに大きいですね。これからどうなるかわかりません。近代史をやっている限りは、「残っている文書はこれしかありませんでした」と言って、ちょっと残念そうな顔をしていれば、なんとなく済みますけど（笑）、これからはそうはいかない。

伊藤 先の暗い話ですけれども、きょうは非常に豊富な資料情報をお話しいただいて、本当にありがとうございました。長時間にわたりまして、ありがとうございました。

（終わり）